第５４回九州芸術祭文学賞　選考経過と講評

宮崎県の今年度の応募数は２２編。昨年より３編多かった。男女の内訳は男性１３名、女性９名。年代別では２０代１名、３０代１名、４０代２名、５０代６名、６０代７名、７０代２名、８０代３名で、昨年同様５０代と６０代が多かった。

審査は例年通り応募者の名前を伏せた上で厳正に行い、まず以下の１２編を一次選考通過作とした。

受付順に「月下の九紋龍」、「プラトニック・ベイビー」、「寺田屋騒動」志士たちの遺言、「まだらご」、「どしてん　こしてん」、「夢を殺す」、「エチュード」、「子猫日和」、「迷彩工場」、「チェンジ」、「蓑虫」「モザイクと鼠」。

これらの中から再度、テーマ、構成、文章力などさらに細部にわたり話し合い、「月下の九紋龍」、「プラトニック・ベイビー」、「どしてん　こしてん」、「エチュード」、「迷彩工場」、「チェンジ」の６作品を二次選考通過作とした。

さらにそこから長時間の論議の結果「プラトニック・ベイビー」が地区優秀作に、「どしてん　こしてん」が地区次席に決まった。

以下、受付順に応募作の感想を簡単に述べておく。

「宇宙人　烏帽子を冠った男　玉蜀黍と米」　宇宙からやってきた烏帽子を冠った男と結婚した地球人類の少女が躍動的で魅力的だ。しかし後半が説明に流れている。物語のラストまでロマンあふれるストーリーにすると面白い作品になったと思う。

「月下の九紋龍」　市の広報課で働く３２歳の主人公が抱える心の葛藤。主人公は背中に九紋龍の彫り物をしたサーファーと出会い、前へ進もうと決意する。地方定住、ゴミ問題、LGBT など今日的課題を取り入れているところも評価したい。

「プラトニック・ベイビー」　主人公がある村の薬種商で精子を買う場面から始まるこの物語は作者の詩的なリズムのある文体と筆力で読み手を引き込んでいく。肉体を重ねることのない真実の愛を追求する展開は観念的な印象も受けるが、結末は納得させるものがある。

「寺田屋騒動」志士たちの遺言　日向細島にある「黒田家臣」の碑の謎を解き明かした時代物。明治維新を直前にし、解体直前の武家社会の実態を描いている。史跡から歴史を紡ぎ出す歴史小説の好短編となっている。

「まだらご」　山深い村を舞台にした少女とその家族の歴史と成長の物語。全体に素朴で飾りのない語り口でほのぼのとした中にドキリとするような村の習俗や暮らしが描かれていて「まだらご」という特異な物語の世界ができあがっている。

「入道雲は見ていた」　かつての支援学級の、小耳症で難聴の教え子が中３になり、今は県北の学校に転勤になった主人公のもとにいじめを受けていると電話をかけてくる。陰湿ないじめ、両親の離婚、そして父親もろとも事故死してしまう教え子。入道雲が印象的である。

「赤い手袋の記憶」　大学の講義で社会実験に参加することになった男女二人の大学生。

「究極のお人好し」とはと、二人はそれぞれ答えを求めて行動する。おばあさんの終活を手伝ううちに母親への感謝の気持ちに気づいていく女子学生の心の動きがよかった。
「カサブランカの家」　私（中２）は夏休みに友人と福岡に遊びに行く。太宰府でみんなと別れ、いとこの真と九州国立博物館を見学した後、真の家へ行った私は、亡くなった真の実母のことや真の子供時代の話を聞く。カサブランカの花が印象的に使われている。
「土曜日の死」　朝、目を覚まして今日が死ぬ日だ、今日俺は死ぬのだという意識を持ちながら一日を過ごそうと思う私。だがそれはできなかった。メメント・モリを作品のモチーフとしているのだろうが、もう少し私の死に対する考え、心理を掘り下げて書いて欲しかった。
「時空のバディ」　航空自衛隊新田原基地からスクランブル発進した主人公が落雷に遭い１３００年前にタイムスリップする話。そこでは百済から逃れてきた禎嘉王一族と新羅からの追っ手が戦っていた。禎嘉王伝説を基にして、戦闘シーンやロマンスありの物語。
「あっこちゃんがいく」　とても爽やかな文章。周りの人をあっという間に取り込んでしまう才能と、人を傷つけずに幸せな気持ちにさせるあっこちゃん。素敵な友人を持って主人公は幸せだなと暖かい気持ちになる。小説というより旅行記のような文章が気になった。
「どしてん　こしてん」　敷地内に古墳がある設定も、姑の描写や姑とわたしの会話にもユーモアがあり、行間の風通しもよく情景や展開がすっと入ってくる。無駄のない軽快な文章で安定して読める作品。ただ古墳Ｇメンのことが曖昧に終わっているのが物足りなかった。
「夢を殺す」　東京での俳優活動を諦め地元に戻った青年の胸にぽっかりあいた穴。胸底に沈澱する澱みは息苦しくなるほどよく描けている。青年の挫折と葛藤、立ち直ろうとする姿は心を打たれるが、こうして立ち直っていくのだろうと思わせるラストが少し物足りない。
「エチュード」　４章からなるこの作品は１章は姉、２章は弟、３章は母が語り手となる。描写は丁寧だが表現に硬さの見られるところもあり、６０枚という限られた枚数の中で語り手が３人も変わるのは無理がないか。しかし最後まで読ませる力のある作品だった。
「子猫日和」　長男の嫁に子供ができないのは、自分が子供の頃猫をいじめたことが原因ではないかと思う男が拾ってきた子猫。男は事故死。男の棺に入り込んだ子猫は一緒に土葬される。そこからとんでもない展開になるのだがラストは丸く収まりそうでほっとする。
「迷彩工場」　戦争と国の政策に翻弄され事実を知ったときの主人公の驚きや、臨時工としての不安を抱えた日々がよく描かれている。タイトルもいい。しかし終戦という節目の区切りもないままＳ２０年８月５日から翌年２月に話が飛んでいるのは少し気になった。
「再会」　時は嘉永。女に二股をかけ、最後は切られて死んでしまう青物屋を営む男の話。当時の物の値段が書いてあるのは興味深かった。会話も粋でこなれているが、もう少しひとつひとつのシーンや人物の心情を丁寧に書いて欲しいとも感じた。
「チェンジ」　小５のとき父親が仲良しだった友だちの母親と再婚。家族はバラバラになり祖母と暮らす主人公は悩み、頑なに心を閉ざすが、叔母の言葉で解き放たれるまでを正面から切り込んだ思春期の少女の物語。高校の女子レスリング部員という設定が新鮮でいい。
「蓑虫」　親に捨てられた少女美沙が日雇いの男に拾われ一緒に生活するが男は仕事に行

ったきり帰ってこなくなる。１５年後、美沙の働く施設に入所してきた男は認知症を患っており美沙のことを覚えていない。ラストの「帰りてえな」と言うような声は胸に迫ってくる。

「偽伝・早見東作」　健脚から大名飛脚となる瀬川広之進は幕軍から官軍に鞍替えするのにもたついた藩主に飛脚連絡の遅れと責任を押しつけられる。その後、西南戦争で再び飛脚として働く彼は官軍の襲撃を受ける。風景描写と共に彼の疾走する息遣いがきこえるようだ。

「神社」　少子高齢化の進む山間の小さな集落の自治会で老朽化した神社の建て替えが話し合われ、神社が完成するまでの新自治会長になった男の半年間の奮闘物語。限界集落の実態を丁寧に描いた作品である。

「モザイクと鼠」　高校生の僕にとってのAIチャットアプリ。同じクラスの女子平野さんが自分はAIチャットアプリ「RBM」の回答者だと言う。少し謎めきSFめいているが、物語の中にはAI批判もあり、僕の内面描写や表現には感性の鋭さを感じさせるシーンがある。